



広島大学総合科学部報

飛翔

第85号

25フェロー紹介
研究室紹介
“25による”オススメ授業紹介
OB・OG紹介
総科で輝いている人

広島大学
総合科学研究科・総合科学部
広報・出版委員会
飛翔編集委員



飛翔 第85号

<目次>

巻頭言

25 フェロー&班紹介

研究室紹介

“25による” オススメ授業紹介

OB・OG 紹介

輝いている人

レビュー×レビュー

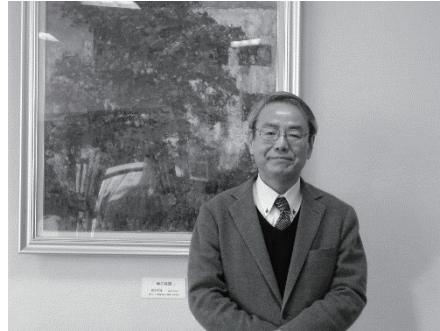
飛翔な日々

編集後記



巻頭言

「グローバル化」時代と大学、 総合科学部



よしだみつるのぶ
吉田光演
総合科学研究科長
総合科学部長

一・総合科学部との出会い

総合科学部（総合科学研究科）に来て二十年立つ。高校までの大阪、学生時代の金沢、前任地（琉球大学）の沖縄：気がつくくと、広島での生活が最も長くなった。専門のドイツ語や言語学の研究はどこにいてもできる。学部や大学院での授業は面白いし、学生や同僚、異分野の研究者と話す楽しみは格別である。ここ数年は運営に関わり、研究科長・学部長の仕事で忙しくなり、あつという間に時が過ぎ去った。元々広島にも総科にも縁はなかったが、一年頃からコンピュータやインターネットに興味を抱いてコンピュータ支援外国語教育に取り組んでいた矢先に広大に移り、当時まだ真新しい東広島キャンパスでコンピュータ教室を存分に使うことができた。総合科目や情報科目、総合科学研究プロジェクトなど、学際的教育研究に関わる中で、総合科学の色彩に染まってきたと思う。が、実際は忙しい日々にかまけて好きなこ

とをしてきただけのことかもしれない。

二・国立大学とグローバル化

しかし、研究科長となると、さすがにマイペースではいられない。学部と研究科、ひいては大学のことも考えねばならない。国立大学は法人化されたが、授業料の他、文科省から運営費交付金を予算として受けている。国費を使う以上、好き勝手に教育するとは言えず、納税者に対する説明責任が問われる。科学の発展、社会貢献、人材育成のために大学を改革すべきという政府文科省の方針にも対応しなくては行けない。もつとも、OECD加盟国の中で日本が教育にかける公的支出は最低レベルにある。これが問題で、多くの国民に「もつと高等教育に予算を回せ」と言っただけなのだが、大学もこの状況を社会に発信すべきである。

さて、世間では「グローバル化」「グ

ローバル人材」といった言葉が溢れている。実際、どの大学もグローバル化対応が迫られており、学生諸君もそう感じていることだろう。大学院では留学生が増えており、私も良く使うが、「グローバル化って何」と正面から聞かれると、その定義は曖昧である。国際化とは違うのか？なぜグローバル化しなくてはいけないのか？流行語のように氾濫する言葉は意味が希薄化し、単なる掛け声になる。そこで少し立ち止まって、大学における、本学部におけるグローバル化の意味を考えてみたい。

三．「グローバル化」とは？

日本は貿易立国だが、島国で流動性に乏しいこと、広く門戸を開く意味での国際化の重要性は前から指摘されていた。しかし、以前は外国に行くには費用がかかった。何より米ソ超大国に

よる東西対立が世界を分断していた。一九八〇年に私が文部省交換留学生として旧西ドイツに留学した時の航空運賃は片道三六万円で、私費では到底行けなかった。シベリア上空は飛べなかったので、ヨーロッパに行くには南回りか、アンカレッジに飛んで、そこから北極圏を超えねばならなかった。留学先バイエルン州は旧東ドイツと旧チエコスロバキア国境に近く、国境には鉄条網が張り巡らされていた。ベルリンにも行ったが、西ベルリンを囲む厚い壁に冷戦の存在を実感した。その後の壁崩壊は、核戦争の危機を孕んだ東西冷戦の終わりを告げる幕開けとなり、ソ連崩壊とともに市場経済の波が自由化・グローバル化として各地に押し寄せた。八九年にもドイツに滞在し、九十年元旦はベルリンで過ごしたが、世紀の大事件を見ようと各国の人々が集まる熱狂の中で自身興奮するとともに、壁の崩壊が同時に、マグマのように溜まっていた各地の民族意識の爆発を引

き起こすのではと、仄かな不安を感じた。

グローバル化は、国単位の経済や社会的活動が国境を越えて世界規模で流動化することである。情報ネットワークの果たした役割も大きいが、出発点は冷戦後の米国流資本主義の拡大にあった。企業活動は国を超え、人、モノ、金は世界中を移動するようになった。しかし他方、国民国家は厳に存在する。民族や文化も多様であり、それらの境目は国家とは一致しない場合が多く、経済格差、政治対立、紛争を惹き起す原因にもなる。同時多発テロ以後の世界は多極化しており、一つの価値尺度による標準化はあり得ないことも確かである。EUのように、複数の国と民族を認めた上で域内の壁を取り払い、人や文化の交流を自由に行う統合の動きはあるが、同時に多言語・多文化の共生を認めている。グローバル化を考える際には、標準化だけでなく、地域固有の文化的社会的同一性を前提した

上で、相互交流を自由に行い、格差や不利益をなくすることが重要である。それがどんなに困難であるかは、域内経済格差や財政危機に苦しむEUの困難が示している。また、日本も一員であるアジア地域の不安定な状況を見れば明白である。それでも人々が世界を往來するグローバルな動きは止まることはない。これを踏まえた上で、我々は平和と相互理解に向けた対話を行っていく必要がある。

四・グローバル化時代の大学の役割

九九年ボローニヤ宣言で、欧州高等教育の統一化に向け、学生、教員の自由な移動、学位の標準化が謳われたように、研究教育でも国の壁をなくす方向に向かっている。理系分野では英語で発表し、英語で論文投稿するのは日常的である。インターネットの普及で、どこからでも革新的研究を発表できる

ようになった。他方、文系では国単位の活動が多く、英語の比重も小さいが、国際誌への論文投稿は増えつつある。私の場合、ドイツ語研究が中心で、ドイツ語論文を書くことに国際化の意味があるが、それでも英語論文を読み、英語で発表される国際会議に参加する機会も増えている。中世のラテン語のように、英語が国際通用語になりつつある傾向は確実である。この意味で英語学習は大切である。しかし、多様な文化と同様、「世界(複数) 英語」もあり、日本人英語もあって良い。もちろん、多言語・多文化を認めることが前提で、英語だけでなく、他の外国語も学ぶことが大切だ。日本人の場合、日本語について知り、日本の歴史や文化を学び、自分で思考し、他の文化圏の人々と積極的に議論する姿勢が重要である。

大学は、中世ヨーロッパに誕生した時点から国境を超えた性格を刻印されていた。近代科学の発展とともに歩ん

できた現代まで、大学は学問・科学の普遍的価値を探求する場であり、地域や国を超えた存在である。翻って、総合科学部の理念は、「学際性、総合性、創造性を基本理念とし、総合的知見と思考力を涵養する」ことであり、「異文化への共感と理解を深めると同時に、自己の見解を説得的に提示することにより、国際社会で活躍できる、積極的に意欲にあふれた」学生像を掲げている。このような理念と育成目標は、地球規模で流動化する社会という意味でのグローバル化と符合する。従って、これらを一層具体化し、教育研究で社会にアピールしていくことがグローバル化に対応することになる。学生諸君にも是非がんばってほしいと思う。